

## Disease Activity and Progression of Disability in Multiple Sclerosis Patients Aged Over 50 With or Without Disease-Modifying Drug Treatment: A Retrospective Cohort Study

Akihiro Kondo, Ryotaro Ikeguchi, Kazuo Kitagawa, Yuko Shimizu.

Cureus 15(12): e49927. DOI: 10.7759/cureus.49927

**【背景】** 多発性硬化症 (multiple sclerosis: MS) は若年女性に好発する中枢神経の自己免疫性脱髄性疾患である。疾患修飾薬 (disease modifying drug: DMD) が有効であり、再発や障害進行の抑制に寄与している。MS では加齢に伴い疾患活動性が低下すると考えられているが、高齢 MS 患者における DMD 投与の是非については、一定の見解が得られていない。

**【方法】** 50 歳以上の MS 患者において、DMD 治療群と無治療群間で再発の有無、障害度の悪化、二次性進行型多発性硬化症 (secondary progressive MS: SPMS) への移行を比較し、これらのリスク因子について検討した。各項目は Wilcoxon 検定、 $\chi^2$  二乗検定を用い比較し、各因子は、ロジスティック回帰分析を行った。交絡因子は傾向スコアを用い調整した。

**【結果】** 50 歳以上の MS 患者は 76 例 (女性が 55 例)、平均発症年齢は  $37 \pm 10$  歳、最終受診時の平均年齢は  $57.6 \pm 6.3$  歳であった。DMD 治療群は 51 例、無治療群は 25 例であった。50 歳以上の再発率は DMD 治療群で 33%、無治療群で 48% であり、両群間で有意差はなかった ( $p=0.72$ )。EDSS 3.0 以上の割合も有意差はなかった ( $p=0.28$ )。50 歳時点での RRMS 患者は 61 例であり、うち SPMS に移行した患者は 15 例であった (25%)。ロジスティック回帰分析では、最終受診時の年齢 (オッズ比 1.5、 $p=0.03$ ) と 50 歳時点で脳幹病変 (オッズ比 30、 $p=0.02$ ) が SPMS 移行のリスク因子として抽出された。

**【結語】** 本研究では 50 歳以上の MS 患者において、DMD 治療群と無治療群間で再発、障害進行、SPMS への移行について比較したが有意差はなかった。疾患活動性が低い、機能予後不良因子がない、SPMS への移行リスク因子がない患者では、DMD 投与の中止を検討できることが示唆された。また 50 歳時点で脳幹病変を有する患者では、SPMS への移行リスクが高いことが示唆された。本研究の結果とこれまでの既報告などから、機能予後不良因子がある患者や 50 歳時点で脳幹病変を有するなど SPMS への移行リスク因子のある患者では、適切な DMD の導入および継続が望ましいと考えられた。

